



つながってよかった! の声をかみしめて

2016年9月1日に電話ボランティアとして委嘱状をうけた第40期生。養成講座と実習の2年間を終えて14名が認定されました。この半年間に電話ボランティアを通じて体験したこと感じたこと、また、これからの思いなどを寄せていただきました。

新米相談員の心境？

A.I. 

ある日の電話で、一通り話を聴き終えた頃、通話者が私に尋ねたことがある。

「相談員って楽しいですか?」

うーん、どうだろう。楽しいかと問われると、楽しくはない、むしろ辛い。

どきどきしながら受話器をとり、ひと言も聴き漏らすまいと全神経を集中させる。どんなに価値観の違う相手でも、自分の思いは横に置いてその方の気持ちを受け止める。受話器を置くときはへとへとで、帰りに天神で遊ぶ気力も残っていない。

話を聴いているうちに一筋の光明が見えることもある。通話者が落ち着きを取り戻し自らの力で前向きになってもらうと、わがことのように嬉しくなる。けれどそういう

ことはまれで、無力感や徒労感、内容の重さに胸がつぶれ、数日間引きずることも。2週間で気持ちを立て直しなんとか当番を務めている。

しかしそんな状況でも、止めたいと思ったことはない。それは仲間がいるから。相談員同士で言葉を交わし、悩みを聴いてもらうとほっとする。私も電話をかけてくる方々と同じだ。たとえ問題が解決できなくても、ただ話を聴いて、受け入れてほしいと願っている。そこには愛が必要だ。

いのちの電話とは、人々が愛によって支えあう象徴のような気がする。私にとって相談員の活動も自らの人生も、「辛い」けど「楽しんで」続けていきたい。

「いのちの電話」から学んだこと

H.H. 

電話を取り始めて1年半余り、さまざまな悩みを抱えた方の話に耳を傾けてきました。時間の長短はありますが、受話器から聞こえてくる<声>を介して、必死で相手の様子をイメージし、思いを受け止めることに気力を注ぎました。取り始めた当初は、家に帰って横になり、そのまま夕飯まで寝込んでしまうこともたびたびでした。

最近、人の悩みを聴くことは、相手の信頼を全身で受け止めることだと思ふことがあります。これまで子どもの教育に関わってきた私には、この活動に、何かの縁さえ感じています。

ところで、聴くことに未熟な私は、相手を「分かる」とい

うより、むしろ「通じ合う感覚」を大事にしながら受話器を取り続けています。時には、私が経験するどころか想像すらできない内容の話を聴くことがあります。これまでの「共感」という言葉に空しさを感じる瞬間です。

そんな時には、相手に起きている状況とは、自分にも起こりえたことであり、相手も自分と同じように幸せに生きたいと願っている存在であるという思いを持って、話を聴くように心掛けています。

最後に私は、「いのちの電話」をこれまでの自分の弱さと向き合い、生き方の新たな「気づき」を感得する機会だととらえ、これからも電話を取り続けていきたいと思っています。

初めて電話を受けて

H.K. 

早いもので電話を受け始めて約1年半がたちました。

初めて電話を受けた時のことは今でも鮮明に覚えています。きっと忘れることはないでしょう。その時の私は、座学を終えたばかり、モニターでなんとなく電話相談の雰囲気を感じただけの、まだまだ右も左も何もわからない状態でした。そんな私が受話器を握るなんて、かなり無謀なことと思えました。ちゃんと出来るのだろうか? という不安がもちろんあり、「いのちの電話」に迷惑をかけてしまうのでは? と心配にもなりました。

今振り返るとずいぶん昔のことのようにも思えます。それだけ今までにはない貴重な経験をさせていただいたので。さまざまなお話を受けてきて、驚くこと

ばかりでした。そのひとつは「やっとつながりました」という言葉です。「いのちの電話の目的」に「さまざまな悩みや不安、危機に直面しながら身近に相談相手がなくて絶望したり、生きる力を失いかけているような人々が少なくありません」とあるように、なかなかつながらないほど多くの方が電話をかけていることにびっくりしました。中には次の言葉が出ずに沈黙になることも…。最初はイタズラなのかな? と思いましたが、つながったことに驚いて言葉がでない様子でした。電話をかけてくる方も大変な思いをして頑張っているんだと感じました。

相談員としてはまだまだですが、少しでも何かのお手伝いができればと思います。